

# みんなの居場所

## 裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年5月2日(金)

### GW後半

今年のGWは休みが飛び飛びで、何か損をしたような気分になっているのは私だけでしょうか。そういう意味で私の気持ち的には明日からがGWです。替ではGW後半というところへ行楽にも気合が入っているようですが、あまりに羽目を外しすぎると休み明けが大変ですね。

さてこの時期「5月病」という言葉をよく耳にします。特に学生や新社会人、部活動があった人等に起こりやすい心の不調のことです。心の不調は誰でも起こり得ることであり、それを自覚し対応策を考へていくのである程度は改善することが出来ます。私の場合の対策を少し書いてみます。①音楽を聴く、②読書、③妻と外食する、④美術館や博物館に行く、⑤友人と食事に行く、⑥散歩する、⑦趣味に没頭する...書き出すとたくさんあります。それから手を付けていくかわからないですね。今年は⑥や⑦が最も合理的で実現しやすいかもしれません。でも③が絶対にやらなければならぬことのような気がします。そんな人が多いのでは。

### 雑感

毎年ゴールデンウィーク(GW)前は、あれをしたい、これをしたいと計画を立てるのだが、ここ数年、計画通りにならない。今年もそうだ。自分のための時間に使おうというの、そもそも間違いないのかもしれない。GWの後半は「残り2日間は思い切り楽しんで」と意気込むものの、最終日の夜には思い切り後悔する始末。

これは何を意味しているのかと考えてみた。詰まるころ、時間の使い方が下手というのではないだろうか。確かにGW中も仕事のことを頭から離れなかった。何をしていたも仕事のことを考えていた。これで働き方改革を伝えていかなければならない立場にあり、本末転倒と言わざるを得ない。確かに、学校現場は対応すべきことが多い。私の性格的な問題もあるかもしれない。しかし、そんな後ろ向きな事はかり考えていては、働き方改革は前に進まないだろう。

私自身、心に余裕をもって言動をコントロールしなければ、難問で判断を誤るかもしれないと危機感を高めている状況だ。学校人として何かできるかを考えて、子どもたちのために、地域のために懸命に活動していきたい。

### 「コロナ禍」学んだこと

令和2年から始まったパンデミックですが、最近ではマスクをしている人も少なくなってきた。コロナ禍の頃3つの感染症「がまん」を学びました。第1の感染症「病気」、第2の感染症「不安」、第3の感染症「差別」の3つです。第1の感染症は病気のものです。第2の「不安」については、ワクチンや薬も無かったことや分からないことが多かったことによるものです。不安や恐れを感じて振り回されることが多い状況が出て、気づく力や働く力、自分を支える力を弱めます。不安によって人を遠ざけることによって第3の感染症「差別」が起こります。3つの感染症は繋がって正に「負のスパイラル」です。スパイラルの中で敵がすり替わってしまっているのです。本来の敵は「ウイルス」ですが、特定の対象を「見える敵」として遠ざける対象とするのです。負のスパイラルの中で、本当の敵を見失くなり、束の間の安心感を得てしまふ、それが「差別」なのです。

さて、「コロナもきめた」3つの感染症を防ぐためにどうするか？ 第1の感染症には3密回避、新しい生活様式の徹底、衛生行動の徹底です。第2の感染症を防ぐには自分を見つめ、いつも違う自分になつていないか考え、安全や健康のために自分に必要なことを見極め、実行してみることで。そして、第3の感染症を防ぐには「確かな情報」を収集・発信し、差別的な言動に同調しないということが大切です。

そして、頑張っているすべての人にねぎらいの気持ちで敬意を払いたいと思います。日常生活を送って社会全体を支えている人は、私達自身でもあります。自分自身にも敬意を払い、元気に笑顔で日常に感謝して生活していきたいものです。

### シリーズ「自分を語る」#7

さて、フルに到着。昭和40年代、近所にフルもあつた時代です。このフルは「新地フル」と呼ばれていました。他にも有名なところでは「中央フルセンター」、数年後「サンビーン」にもフルができました。(今のサンビーンにはフルがありません。我々世代しか知らない事です。)最近では児童施設やフルが併設されるという状況もあるそうですね。話が反れましたので、元に戻しましょう。

新地フルでは、私の友達ともひさ君とその家族に会うことができた。少しづつフルが見えてきたような感じがしていました。ともひさ君達はまたフルについて時間が経っていないからしくしくフルで遊んでいました。私達兄弟は水着を持っておらず、外からボウツと眺めていたことを思い出します。ともひさ君のお母さんは私達に気を遣ってアイスクリームをくれました。喉が渇いていて、しかも暑い夏の時期で、とても美味しかったことを覚えています。ともひさ君達と一緒に一日自宅に帰り、ともひさ君のお父さんが、私達を再度坪井まで送ってくれたことになりました。もう辺りは暗くなっていました。

一方、私の家族は大変だったようです。手掛かりがないままに時間が過ぎていっているのですから。私達がいなかったに気が付き、再会するまでの時間は3〜4時間程度ですが、両親はとても長く感じたと話しています。

坪井に到着した私達兄弟は、伯母夫婦の家に灯りが点いているのを確認し、「おばちゃんがある」と言って、走って中に入りました。私達を見た伯母は「け行」と言った。ねー」と怒鳴り、それを聞いた母が泣きながら現れました。弟も泣いていて、私はなぜみんな泣くのさううと不思議に思った光景でした。今考えてみれば、当然そうなるよねと解りますが、当時そんな理解力の無い私は「やっとおはちゃんに着いた...」くらいに感覚だったようで、全く人騒がせな澤田でありました。

お巡りさん達まで巻き込んだこのドタバタ劇、この後両親はお礼回りに奔走するのですが、初めに私達に声を掛け、家に送って頂いたあの「おじさん」だけはどこまでも探ることができず、数カ月間探し回ったのですが、お礼を言えないままだったそうです。(つづ)